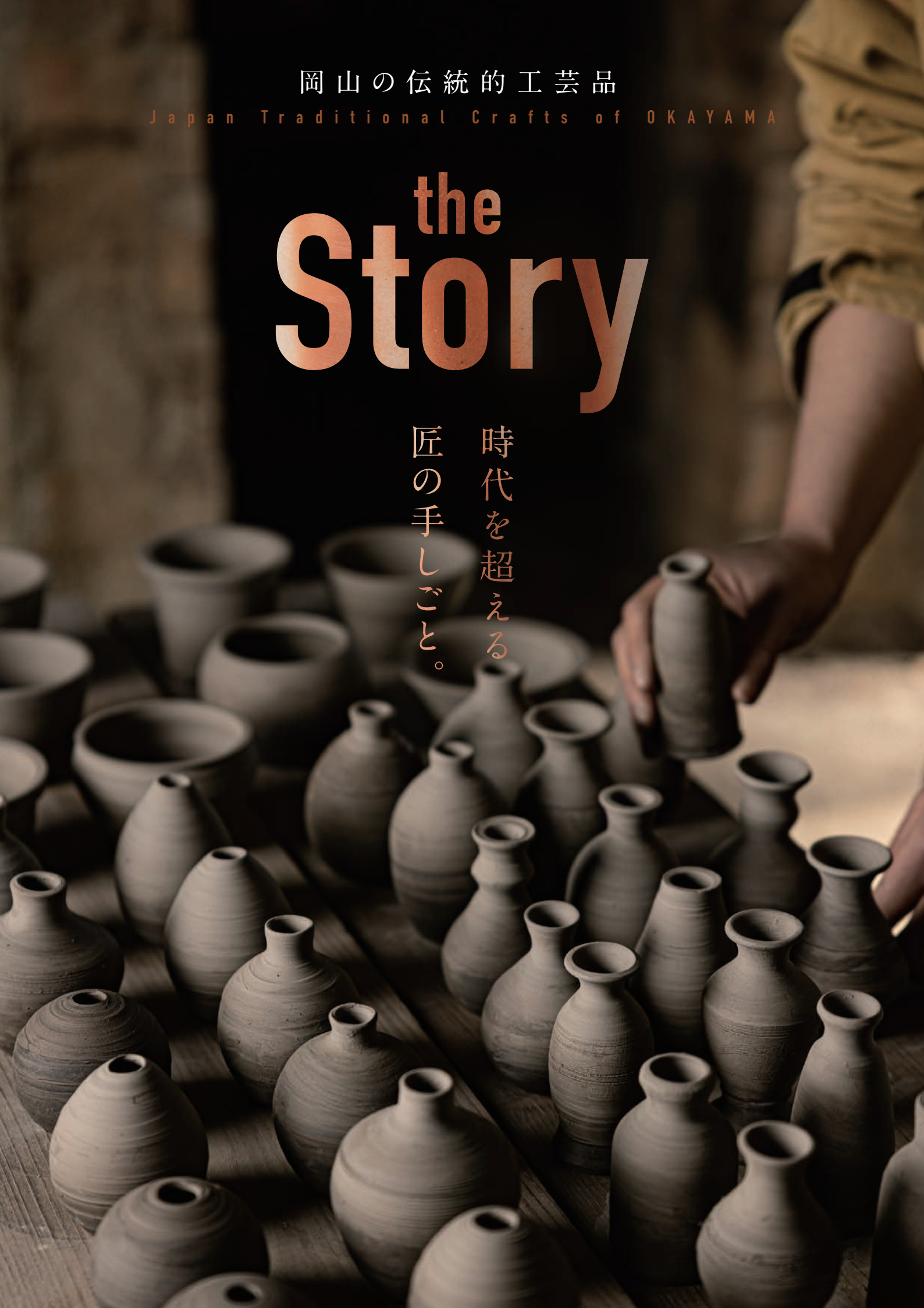


岡山の伝統的工芸品

Japan Traditional Crafts of OKAYAMA

the Story

時代を超える
匠の手しごと。



備前焼

国指定

【指定年】
昭和57年11月

【製造地域】
備前市
岡山市
瀬戸内市

釉薬も絵付けも施さない
土と炎が織り成す芸術品

千年の時を超えて 受け継がれる焼き物

瀬戸、常滑、越前、信楽、丹波とともに日本六古窯のひとつに数えられる備前焼。そのなかで最も古い窯場のひとつとされ、千年以上も窯の火を絶やしたことがないといわれる、由緒ある焼き物です。

最大の特徴は、釉薬も絵付けも施さない、簡素で素朴な美しさ。よく見るとその模様は変化に富み、ひとつとして同じものがないことに気付きます。備前焼に表情を刻むのが、登り窯の中で赤く踊る炎です。松割木（赤松）を燃やし、約1200℃にも達する高温の窯でじっくりと焼くこと約10日間。古くから受け継がれる「焼締め」技法で焼成することで、焼く前には何の模様もなかった陶肌に炎の足跡「窯変」が現われるのです。灰が積もりいぶし焼きにされることで灰色や暗灰色が生じる「棧切」、灰が高熱で溶けて自然釉化した「胡麻」、ワラを巻くなどして緋色の線を現す「緋襷」など、作品の置き方、重ね方を工夫することで、個性豊かな窯変が生み出されていきます。灼熱の炎が描く千差万別の窯変こそ、備前焼最大の魅力といえるのです。



1



2



3



4

1 きめ細かく粘り気がある「ひよせ」の土で作品を作り出す。作品の種類や作家の好みで山土を混ぜることもあるという。2 登り窯で約10日間、高温でじっくりと焼き締める。その間、陶工たちが寝ずの番で火を守る。3 JR伊部駅の周辺は窯元やギャラリー、ショップなどが集まる備前焼の里。備前焼ミュージアムや伝統産業会館、備前焼で提供する飲食店もあり、見て、買って、食べて、その魅力を存分に楽しめる。4 窯焚きに使われる赤松の割木。備前焼独特の窯変を生み出すために欠かせないという。

美しさの根底に 備前の土と匠の技あり

「一土、二焼け、三形」といわれるほど、釉薬を施さない備前焼において、土づくりはその出来栄を左右する要といえる工程です。原料となる土は、備前市伊部地区から香登地区にかけて堆積した「ひよせ」と呼ばれる田んぼの

底から採取したものの。鉄分と有機物を多量に含む粘土質の備前の土は、高温の炎と反応することで多彩な窯変が現れるといわれます。採取した「ひよせ」は数年ほど風雨にさらし、粘土の粒子の大きさを分ける「水簸」、水分を抜く「かげ干し」、熟成させる「寝かし」といった数々の工程を経て、ようやく土が完成。その後、土の状態を見極め、手の

感覚を頼りにロクロで成形していきます。素朴なデザインだったり、洗練したフォルムだったり、作家・窯元ごとに作風はさまざま。伝統的な花器や茶器はもちろん、ビアカップや普段使いの食器なども人気です。簡素な中にも美しさも称える備前焼。絵付けも釉薬も施さない自然色の器は、どんな暮らしにもすっと溶け込む魅力を持っています。

Background ~ものづくりの背景~



1000年以上の歴史を誇る焼き物

古墳時代に須恵器を生産していた工人が、平安時代に日用雑器を作ったのが備前焼の始まり。鎌倉時代には備前焼特有の茶褐色へと変化。桃山時代になると、簡素な美しさが「わび・さび」の茶道の精神に合致。江戸時代には藩の保護を受け、全国にその名が知られるように。戦後には金重陶陽をはじめ、5人の人間国宝を輩出。産地として確固たる地位を築くまでになったのです。

注目!

多様な焼き色の表情

燃料となる松割木（赤松）の炎や灰が作品に作用して生まれる千差万別の焼き色。これは「窯変」と呼ばれ、釉薬を施さない備前焼にとって、大きな個性となっています。ひとつとして同じものがない窯変。その代表的な模様を紹介します。



ひよせ
緋襷

ワラを巻いて焼くことで生まれる模様。白っぽい陶肌に、緋色の線が襷のように入ることが名の由来。



さんざり
棧切

空気が滞り、いぶし焼きになることで生じる模様。灰色、暗灰色、青色などの色が浮かび上がる。



こま
胡麻

松割木の灰が高熱でとけて釉化（ガラス化）し、胡麻をふりかけたようなボツボツとした模様が現れたもの。

て おり さく しゅう かすり 手織作州絣

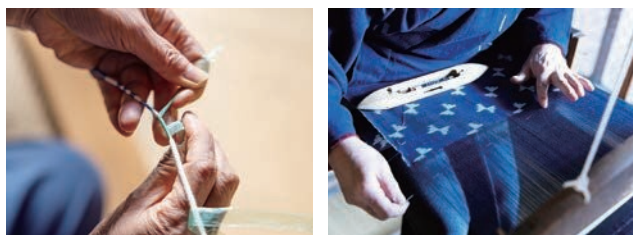
県指定

【指定年】
昭和56年1月【製造地域】
津山市

藍と白が織り成す
シンプルで可憐な絣模様



Background ～ものづくりの背景～



庶民の織物から発展を遂げる

津山地方では17世紀初めに綿栽培が始まり、庶民が野良着や座布団にするための織物を作っていました。明治初期に山陰から絵絣の技法が伝わり、その後「手織作州絣」と名付けられ、全国に広まりました。



注目！

多彩な小物

使うほどに肌になじむ
やさしい風合い

津山市で作られている「手織作州絣」は、藍色に映える繊細な幾何学模様が特徴の織物。太めの木綿糸が使われていたことから、丈夫な生地として庶民の間で親しまれてきました。模様のモチーフになるのは椿や松、鶴や亀など縁起がいいとされるものが多く、現在ではこれらの図案を組み合わせることで、伝統を受け継ぎながらも新たなデザインを追求しています。手織作州絣特有の繊細な模様を生み出

す要となるのが「括り」の工程。紡いだ糸を束にして、模様になる部分を紐でしっかりと括り、染料となる藍が染み込まないように入します。括りの間隔をあえて空けることで模様の濃淡を出したり、緯糸と経糸の両方に括りを施すことで動きのある柄を表現したりと、織工の技術と感性を活かした模様が生み出されていきます。織りの工程を経て、できあがった反物は、着物だけでなくブックカバーやがま口財布、名刺入れといったさまざまな小物に縫製。木綿のやさしい肌ざわりで手になじみ、日々の暮らしに溶け込んでいます。

倉敷はりこ

県指定

【指定年】
昭和56年1月

【製造地域】
倉敷市

愛らしい造形と表情を
一貫した手作業で作ります



150年以上続く
縁起物の郷土玩具

ころんと丸みを帯びたフォルム、鮮やかでカラフルな色彩、どこか愛嬌のあるユーモラスな表情が魅力的な「倉敷はりこ」は、岡山県西部の倉敷地域で明治初期から作られている縁起物の郷土玩具です。わずかな風にも首を動かす「首振り虎」が代表作で、ほかにも干支をモチーフにしたものや各種面の張り子も登場し、多くの人に親しまれています。その作り方は当時と変わらず、型を作るところから始まります。

頭や胴などパーツごとに自作した木型に、和紙と洋紙を6〜7枚ほど張り合わせてしっかりと乾燥。木型から紙を取り外したら、彩色しやすくするため「にかわ」を混ぜた胡粉（貝殻を焼いて作った顔料）で白く塗装し、さらに天日で乾燥。こうしてできた型に、何本もの筆を使い分け、慎重に、ときに大胆に筆を走らせ、ようやく1体が完成します。数々の工程を一貫して手仕事で作っていく「倉敷はりこ」。その素朴であたたかな風合いは、インテリアとしても人気が高く、暮らしに彩りを添える工芸品として愛されています。

Background ~ものづくりの背景~



一子相伝で伝統と技を継承

明治時代、人形師・生水多十郎が男児の誕生を祝い創作した虎の張り子。その評判が広がり、子どもの成長を願う縁起物として定着したのが「倉敷はりこ」の始まり。以来5代にわたり、伝統と技が受け継がれています。

注目！

愛らしい造形



がま細工

県指定

【指定年】
昭和57年9月

【製造地域】
真庭市



機能性と美しさを備えた ひる ぜん 蒜山生まれの暮らしの道具

Background ～ものづくりの背景～



豪雪地域の蒜山で生まれた暮らしの道具

約600年前、兵糧を運ぶ背負いかご「こしご」を作ったのが始まりと伝わるがま細工。半年間の準備期間を経て、編む工程が始まるのはちょうど積雪の時期。昔から冬の仕事として、各家庭で作られていたといえます。



注目！

日常使いの品

長い準備期間を経て 丁寧に編んでゆく

県北部に位置する蒜山地域で育つ植物「ヒメガマ」。防水性に優れ、軽くて丈夫なことから、その機能性とガマ本来の艶を活かして作られているのが「がま細工」です。かつては、雪が多いこの地域に欠かせない雪駄や蓑などに加工されていましたが、今では大小さまざまな手提げカゴや花筒なども登場し、現代の暮らしに溶け込む用品として広く親しまれています。作り方は当時と変わらず、多くの手間と時間

を要します。ヒメガマの栽培から始まり、収穫した後に傷やシミがなく色付きが良いものだけを厳選。編み込み用の小縄も自らが手掛け、ヤマカゲ（シナノキ）から取り出した繊維を手で撚る工程が出来栄えを左右することから、修得するまでに3年はかかるといわれています。こうして用意した材料を木製の織機「こもげた」と錘になる「つちのこ」で編み込み、丁寧に手作業によって生み出されるがま細工。その丈夫さから長く愛用できるのが特徴で、次第に飴色へと変化していく様子も魅力のひとつとなっています。

鳥城紬

県指定

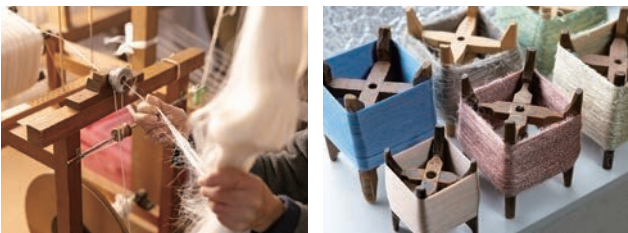
【指定年】
昭和63年4月

【製造地域】
岡山市

唯一無二の糸の紡ぎ方で
やわらかであたたかな織物に



Background ~ものづくりの背景~



風土と作り手が育んだ織物

江戸時代、児島湾干拓により綿栽培と綿織物が盛んに行われた岡山県南部で発祥した鳥城紬。大正時代には製織技術に数々の改良が加えられ、素材も綿から絹に移行。現在の鳥城紬の礎が築かれていきました。



注目!

豊富な種類

幾重もの色が織り成す
美しい縞模様

岡山の象徴ともいえる岡山城は、漆黒の佇まいから鳥城とも呼ばれる名城。その名を冠した鳥城紬は、200年以上受け継がれる織物です。かつては工程ごとに分業で作られていましたが、昭和の中頃から糸紡ぎや染色、整経、機ごしらえ、織りなど、すべての工程を1人で行うようになり、ほかの紬の産地とは異なる製織法へと変化していきました。最大の特徴は、柔らかくしなやかな手触り、軽くてあたたかいうるさみ

地の良さ。これを生み出しているのが、糸に撚りをかけない緯糸の紡ぎ方です。やさしく束ねた数本の生糸に、独自改良を加えた紡ぎ機でコイル状に糸を巻き付けることで、空気を含んだようなふわとした緯糸に。あえて本数を少なくした経糸と重ねていき、唯一無二の感触が紡がれていくのです。縞模様を基本とした柄も鳥城紬の魅力のひとつで、草木染めの色糸が織り成す素朴でやさしい風合いは、着物通からも一目置かれています。最近では、巾着やテールセンター、ペンケースなど現代の暮らしに寄り添う用品も作られ、広く親しまれています。



Story

6

かつ やま たけ ざい く
勝山竹細工

国指定

【指定年】昭和54年8月

【製造地域】真庭市

Background

～ものづくりの背景～

実用品であるがゆえに古い品が現存していないため、勝山竹細工の起源は不明確です。しかし、万延元年(西暦1860年)の古文書などに「亀そふけ(亀そうけ)」などの文字が記されていることから、江戸時代末期にはその技術や技法が確立され、広く流通していたと考えられています。

清々しく美しい
青竹で作る竹細工

真庭郡勝山町(現真庭市)で生まれた勝山竹細工は、素朴な力強さが印象的な実用性の高い竹細工です。かつては、「そうけ」と呼ばれるザルを中心とする農業用の運搬具や家庭用の容器などが生産されていましたが、時代の移り変わりとともにパン籠や盛り籠、花器といった用品も作られるようになりました。ほかの多くの竹細工に見られる皮むきや晒(さら)しなどの加工を一切行わない勝山竹細工は、地元や周辺市町村で育った真竹そのものの清々しい色と甘い香りが最大の特徴です。竹表面と内側から取った青と白の2色の「ひご」を交互に編み込む、「ござ目編み」ならではの独特の美しい模様が、使い込んでいくうちに飴色へと変化。その様子を楽しむのも魅力のひとつとなっています。

Story

7

つ やま はく あい し
津山箔合紙

県指定

【指定年】昭和56年1月

【製造地域】津山市



Background

～ものづくりの背景～

県北一帯の和紙作りの歴史は奈良時代までさかのぼることができます。かつては多くの家が和紙作りに携わり、いつしか冬の「川ざらし」はこの地の風物詩となりました。現在、唯一の生産事業者である上田手渡和紙工場が濃く津山箔合紙は、高く評価され、海外にも輸出されています。

金箔工芸に不可欠。
希少な高級和紙

岡山県北部に広がる美作地方はミツマタの一大産地で、紙幣の原料として国立印刷局に納めていることからこの地のミツマタは「局納ミツマタ」とも呼ばれます。津山箔合紙は、そんなミツマタを原料とする高級和紙で、さまざまな工程を経て作られています。ミツマタの葉が落ちる11月頃に刈り取った枝を蒸し、むいた皮を干して乾かした後、釜で煮ます。それを川の水で晒し、叩くなどして繊維をほぐして作る紙素を、簀(す)笥(た)という道具を使って一枚ずつ漉きあげます。こうしてできる津山箔合紙は、やや赤みを帯びて光沢があるのが特徴。薄くてかさばらず、表面がなめらかなことから、金箔や銀箔を挟む「箔合紙」として京都や金沢の金箔工芸に欠かせない存在となっています。



Story

8

なつ かわ 撫川うちわ

県指定

【指定年】昭和57年3月

【製造地域】岡山市

「涼」と「美」が漂う
風雅なうちわ

岡山市の撫川地区で作られている撫川うちわは、粋で艶やかなひと品です。うちわの上部に描かれた雲形の模様の中に、一筆書きで俳句を表現した「歌継ぎ」の技法。そして、明かりにかざした時に、俳句の文字とそれに呼応する花鳥風月の絵柄が鮮明に浮き出る「透かし」の技法。まるで美術品のように美しく粋なうちわを生み出しているのは、2つの技法を駆使する職人です。竹を64本均等に割る骨作り、自ら和紙を染める紙作り、透かしの仕掛けを施すため3枚の和紙を寸分の狂いなく張る紙張り。それらの工程をすべて手仕事で行うため、1人の職人が作れるのは年間にわずか150本たらず。そのため、なかなか市場に流通しない幻のうちわとして珍重されています。

Background

～ものづくりの背景～

撫川うちわは、江戸時代前期に庭瀬藩主となった板倉家から、うちわの技術が伝わったことに始まります。江戸時代後期には「撫川うちわ」として天下にとどろいていましたが、明治期に衰退し、戦後は一時消滅。その後、坂野親子が復活させたその技は、現在、保存会「三杉堂」が受け継いでいます。

Story

9

びっ ちゅう わ し 備中和紙

県指定

【指定年】昭和57年3月

【製造地域】倉敷市



歴史ある和紙で
暮らしを豊かに

Background

～ものづくりの背景～

備中和紙の源流は、飛鳥時代から1000年以上にわたってこの地方で作られていた「清川内紙」。その歴史は昭和39年に幕を閉じましたが、丹下哲夫氏(現岡山県重要無形文化財保持者)が失われた技術を甦らせ、倉敷民藝館初代館長・外村吉之介氏によって備中和紙と命名されました。

備中和紙は丈夫で墨の乗りがよく、特に仮名書きに最適とされる手漉き和紙で、原料などの違いから趣や用途の異なる数種があります。古くから備北地域地方の暮らしの中でさまざまに使われてきた、コウゾが原料の「清川内紙」。ガンピを用いて寒中に漉く「備中鳥の子」は、仮名書道小字用に最適とされ、極めて厚く漉かれたものは東大寺昭和立体感がある字が書けるとして仮名書道大字用に重宝されているのは、コウゾに胡粉をまぶして漉いた「備中宇陀紙」。そのほか、岡山県産ミツマタが原料の「備中三椏便箋」や、天然染料で染めた「本染紙」も。和紙職人が丹精込めた和紙は、実用に適しているだけでなく暮らしに癒しとうるおいをもたらしてくれそうです。



Story

10

たか た すずり
高田硯

県指定

【指定年】昭和57年9月

【製造地域】真庭市

凛とした佇まいに
気品漂う漆黒の硯

戦国時代以前からの伝統を持つとされる高田硯は、江戸時代には將軍家への献上品として重用され、宮本武蔵も愛用していたと伝わります。この硯の特徴は、気品あふれる漆黒の光沢で、「金眼」「銀糸」と呼ばれる紋様があるものは特に逸品として珍重されてきました。原石は、名勝・神庭の滝近くの山中で採れる高田石。1億4千万年前頃の黒色粘板岩で、硬すぎず軟らかすぎず、キメが細かいため墨がよくおりる石質です。その優秀さは、江戸時代に藩有とすることで乱掘を禁じていた史実からもうかがえます。そんな高田石の自然な形を生かしつつ手作業で仕上げるため、同じ形はふたつと存在しない高田硯。凛とした佇まいに秘めた優しさと温もりも、魅力のひとつとなっています。

Background

～ものづくりの背景～

高田硯が初めて登場すると見られる資料は戦国時代の「牧文書」で、高田城の牧兵庫助が豊後の大友宗麟に硯を送ったとあります。また、現存する最も古い高田硯は、江戸時代初期の作州高田住村上氏の銘のある品。この頃は盛んに作られており、寺の過去帳にも「硯屋何々」と幾度も記されています。

Story

11

むし あげ やき
虫明焼

県指定

【指定年】昭和63年4月

【製造地域】瀬戸内市



Background

～ものづくりの背景～

虫明焼の起源は年代的に不明ですが、江戸時代に備前国家老伊木忠興が趣味で茶器・花器などを焼かせたお庭窯が、現在知られている虫明焼の起源とされています。その後、茶人として有名な伊木忠澄(三猿齋)の時代に伝えられた京風の作風や、織部、乾山などの風格も、伝統として受け継がれてきました。

茶人にも愛された
飽きのこない色調

瀬戸内海に面し、古代・中世には風待ち、潮待ちの港として栄え、曙の美しさが古くから詩歌に詠まれるなど風光明媚な地としても知られる瀬戸内市邑久町の虫明。その地の良質な山土を主体とする独自の粘土で作る虫明焼は、薄造りの端正な造りと飽きのこない色調が大きな魅力となっています。なかでも、お茶席などでのいろいろな取り合わせで、どの焼き物にもしっくりとなじむやさしい色調を生み出しているのが、天然松灰を主原料に自家精製した透明釉を基本とする灰釉全般や鉄釉、銅釉といった釉薬。これらを使い分ける作品はバリエーション豊かで、酸化と還元を完全に分けないう独自の焼成により現れる窯変は、深い味わいを楽しませてくれます。



Story

12

津山ねり天神

県指定

【指定年】昭和63年4月

【製造地域】津山市

男子の成長を願う 素朴な天神様

美作地方は、菅原道真公の父君が国司を務めたためか、古くから天神様を学問の神様として崇拝する土地柄でした。そして、いつの頃からか、男の子が誕生すると、天神様のように賢い子に育つようにという願いを込めて天神様を贈り、旧暦の3月3日に初節句を祝う風習が生まれたのです。その際に贈られるのが、津山ねり天神です。和紙の繊維を練り込んだ粘土を使って前後2つの型で胴体を抜き、素焼きすることなく、生乾きの状態で張り合わせ、天日で乾燥させた後に彩色。別に作った頭部を差し込んで完成させます。全国的にも極めて異色なこの工芸手法で作られる津山ねり天神は、古くから庶民の間で親しまれてきた天神様の素朴な雰囲気、今に伝えていきます。

Background

～ものづくりの背景～

菅家7流のひとつである植月家の7代目清六が、寛政年間に津山の京町に宿屋を開くかたわらで「ねり天神」を販売したのが、津山ねり天神の始まりとされ、明治時代までは盛んに作られていました。その後、次第に衰え、戦時中に途絶えましたが、戦後、製作が再開されました。

Story

13

郷原漆器

県指定

【指定年】平成4年11月

【製造地域】真庭市



Background

～ものづくりの背景～

大山街道の郷原宿(現蒜山西茅部)を中心に生産されていたことから「郷原塗」と呼ばれていました。古くから庶民の間で愛用され、最盛期には松江や出雲地方にまで流通していたと伝わります。その生産は昭和時代に一時途絶えましたが、平成時代に郷原漆器生産振興会が復活させました。

独特の技法で作る 暮らしを彩る漆器

郷原漆器は、蒜山高原に自生するヤマグリを用い、備中漆等の天然の漆で仕上げられています。ヤマグリを生木のまま輪切りにし、年輪の中心を一気に口く口挽きするという、ほかの漆器産地では見られない独特の木地作り技法が大きな特徴です。伝統的な郷原漆器は、長年堆積してきた蒜山産の珪藻土などを用いる下地作りで木地の木目をつぶし、朱か黒の漆を塗って仕上げます。しかし現在は、木地に生漆を塗っては磨き、乾燥させる「拭漆」という工程を繰り返すことで、漆特有の艶と美しい木目を際立たせた品々も数多く見られます。漆は一度固まると強靱な塗膜を形成するので耐久性が高く、使うほどにその艶は深まります。まさに眺めてよし、使ってよしの一品です。



岡山で受け継がれてきた
匠の技の物語。



購入に関するお問い合わせ先

 晴れの国 おかやま館
OKAYAMA PREFECTURAL LOCAL PRODUCTS CENTER
(公益社団法人 岡山県観光連盟)

〒700-0822 岡山県岡山市北区表町1丁目1-22
[T E L] 086-234-2270
[E-mail] info@okayamakan.or.jp
[開館時間] AM10:00~PM7:00
[休館日] 毎週火曜日(祝日の場合は営業)



工芸品に関するお問い合わせ先

岡山県産業労働部
マーケティング推進室

〒703-8278 岡山県岡山市中区古京町1-7-36
[T E L] 086-226-7365
[E-mail] marketing@pref.okayama.lg.jp

2023年3月発行